

花袋氏を見舞ふ

徳田秋声

…三…

田山氏の「残雪」は前にもいう通り、トルストイズムの気分が多分に見えるし、又宗教家的な自己省察と人生の苦悶と、自然の力の前にはどうにもならない人間の微弱さを歎ずる詠嘆とがあるが、人生のけい縛（繫縛）煩惱や愛着からのしっこく（桎梏）から逃れようとするもがきや、霊の眞の憩いどころを求めようとする真理へのあこがれが、むしろ使徒のざんげ（懺悔）のような誠実さと眞しさ（真摯さ）で現れているが、氏が地方で土の労働に従事しているある旧知の老人を尋ねて、果樹の栽培法や麦や米や野菜の作り方や、全て田園の労働生活について研究しているところは、氏の心が、愛欲の苦悶や生死の問題や、全ての人生社会についての見解が、余りに真剣なものであるからではあるが又氏が自然に対していかにかといふことがわかる。私も人生も好きだが、土も嫌いではない。木や花も好きである。あるいは異性よりも、金よりも、劇や映画よりも、日本料理や支那料理よりも、その方が好きなのかも知れない。体がもし丈夫だったら、そんな事に働き、すんだ空

気と鮮清な緑色とを呼吸しながら、今いるような現実から離脱したいとも思っている。昔の人は雨読晴耕などといっているがそんな境地は支那風では文人趣味だが、現代の芸術家に取っては、寧ろうらやむべき生活である。しかしそうした労作は私の体が許されないし、土地ももっていない。人間は大抵の人は、現実から離脱しようとしているに違いない。英雄首（こゆうく）を回らせば即ち神仙とは必ずしも唐人の寝語（ねごと）ではあるまい。ある年齢に達すれば、弱気のものか若しくは主我的のものなら、たれでもそうなるに違いない。人生や社会や自己やが、意のままにならないと、大自然に逃れて、霊の安息を得ようとするのは当然である。田山氏もあっちにぶつ突かり、こつらへぶつつかりした果てに、そんな境地に逃れようとしたのでもあろうが、また氏が人として如何に素ぼくであり、純白であり、自然を愛しているかがわかる。田園詩人とか、湖畔詩人とかは、昔から日本にも外国にもあるが、小説家や戯曲家は、今のいわゆる農民文学ならとにかく、イデオロギー以前の問題としては、その境地は仕事と一致がたい。もちろん空想に終わってしまう。もちろん職業として、商売として、もっと社会的に考える場合は別問題だが、この場合は、芸術などのゆう長な（悠長な）仕事に没頭して

いることは許されない。やはり新時代の農民のように終日働くとか、経営に没頭しなければならぬ。田山氏もそれをやるつもりで、実地の見学に行ったのであるが、そこまでは田園生活の職業化を熱望していなかったであろうと想像される。もちろん職業を転化する場合、過渡期の困難も考えなければならぬし、結果も考えなければならぬ。四十を越してからのことだろうから、思い切って入ってゆくことも出来なかったに違いない。私は日本の園芸家が、日本固有の、見かけは悪くもデリケートな香気と味をもっている果物を、全て大陸的な、見かけばかりの不味いものに改作していることに、不満を抱くもので、外国人なら外国の高いメロンよりも、日本の美濃瓜を食うだろうと思えるところも、わざわざ高価なメロンでなければ日本人離れがないように感じるのは、舌の鈍感から来ているというよりも、寧ろ貧乏人の苦しい見栄ではないのか。私は国粹保存主義とも限らないけれど、果実や花や魚類は、日本のものにも随分うまいもの美しいものがあると思うので、その種を絶やすとは矢張り惜しまれる。日本の国産にはろくなものはないかも知れないが、外国の模ほう(模倣)にもずいぶん気の差すものが多いのである。貧弱な国土に産まれたのは余り有難からぬ

ことだし、地震だけでも、とても恵まれていない国民だとは思いうし、いつでも臭い煙草を吸わせられて高い税金を不平等に取られているのも遣り切れないことだが、日本の経済が心配にならない訳にもゆかない。「残雪」に還るがこの小説は筋というものは、別に何もない。いわば心境小説のもっとも深みのあり、広さのあるもので、真剣な氏の生活記録としても貴い作品だというに憚らないが、氏がどこにか真実の生活をつかもうとして恋愛に行き、自然に往こうとして悶えているところは、大体自然主義的な人生観の上に立ったものであるに拘わらず宗教的人道的な氏の本質が、直下^{じか}に出ているものであろう。(終)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改め、適宜補訂をおこなった。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より

(記事は「東京朝日新聞」昭和4年7月16日から28日まで連載したもの)